愛知の博物館

1978年　No.24

愛知県博物館協会

表紙写真　灰釉魚波文四耳壺

瀬戸窯　・14世紀

器高33.5cm　　口径12.0cm

胴径23.8cm　　高台径10.5cm

（愛知県陶磁資料館蔵）

魚波文を施した灰釉四耳壺であり、類例が少ない。従来、魚文を器面装飾として用いた器物には、梅瓶、合子などがあり、四耳壺の例は、本器を含めて二例知られているのみである。耳の間に一匹ずつ四匹の魚を描いており、空間を櫛目波状文で埋めている。この魚文には、眼が二個あり、上から見た魚を表現しようとしたものであろうか。

目　　次

アジアの博物館人（スリランカの博物館）　広瀬　鎮……1

アメリカの理工学系科学博物館の印象　滝本正二……5

施設紹介－　財団法人 古橋懐古館……7

愛知県陶磁資料館……9

民俗館・ビジターセンターを中心とした茶臼山麓
園地計画について　原田猪津夫　……10

アジアの博物館人（スリランカの博物館）

広　瀬　　鎮

アジア地域でシンポジウムがひらかれるということ、それも博物館に関しての会合であるだけに、特に強い関心を抱きましたのは、それなりの理由が、わたしにはあったのでした。

1975年　インドのカルカッタで開催されました、博物館の情報交換をめぐるシンポジウムにわたしは参加して、アジアの博物館の人たちに会って、お互いの国の博物館や、博物館活動について話合うことができました。今回も単に知見をえたというだけではなくて、日本は、アジアの社会の中でどのように生きて行こうとしているのか、そして特にアジアの文化や、社会生活にミウジアム（博物館）がどのように働きかけて行くべきかをめぐって真剣に考え直させられる機会をえたかったのです。

幸い、1977年12月10日からひらかれた「アジアにおける地方文化と部族文化の保存に果す博物館の役割」と題したテーマでシンポジウムがスリランカのコロンボでひらかれ、ＩＣＯＭ日本委員会から正式にわたしが派遣されることになりまして本当にうれしく思いましたものの、果してその任務に充分答えられるものかどうか、まことに不安でなりませんでした。何と申しましても民族学、文化財、民俗芸能などにかかわるアジア各地の博物館の専門家が集まってきます。そしてあらかじめ討議資料としての「報告書（スピーチ・ペーパー）」が用意されていなくてはなりません。

アジア地区シンポジウム
発表するバングラディッシュ　S.アーメン氏

昭和52年10月にひらかれた全国博物館大会においても日本の民俗資料館や、郷土館の博物館としての運営について、宮本馨太郎先生が切々と論じられたことを御記憶の方も多いと思います。そこで、今回のアジア地区の会議では「日本の民俗・民芸関係博物館および郷土資料館の動向」について述べ、各国代表からの意見も聞いてみようと考えたのです。発表論題を「The Preservation of Folk Data and Folk Craft in Japanese Museum」としましたのも、地域社会で今後大いに住民のために役立とうとしている、資料館等の博物館としての成長、そして文化財等の保存に第一義的な機能を果す民俗資料館の将来のことを論じてみたかったのです。今日、日本の現状は、決しておくれているとはいえないかも知れません。地方自治体では年々民芸・民具・郷土館等を建設しています。しかし、そこに学芸員や、社会教育の専門家が配置されている場合が少なく、博物館活動はやはり低調です。こんなことが気になりながら、色々な施設の方々の御協力をえて資料をあつめ、考察をすすめました。ICOM国内委員長の助言指導も得ました。特に力をいれたのは、博物館分布上の特色と文化財保護行政とのかかわりあいや、民具・民俗資料の収集やその保存技術の急速な発展などの諸点でした。すぐれた日本の民俗博物館の文化財保存のための努力や、施設の未来性等々、しらべはじめますとまことにきりがありません。またたく間に出発の12月がきてしまいました。報告書は、論文の形式をとり、スライドも用意しました。日本モンキーセンターのユニークな資料でもあるサルの民俗・民芸資料

についての一項も挿入してすべてを英文に訳し11頁ばかりの印刷物にしあげて、もって行くことにしていました。

もっとも発表は１人20分ほどですから、このいささか長いペーパーはむしろ資料として役立てばと思ったわけです。

○“金がなくてもやる”－スリランカの博物館精神－

今回は実に沢山の各国からの代表にお会いしました。とうてい一人一人の御紹介はできそうにありませんが、シンポジウムを通じてとくに印象をうけた博物館館長さんや、学芸員さんの紹介を通じ、開催国スリランカの博物館のことを以下にのべてみましょう。

参加国は16ヶ国で、オブザバーをふくめ30名をこえる出席者でしたが、一番多く話ができたのはスリランカの博物館関係者の人たちでした。この会議では何といってもコロンボ博物館のド・シルバー博士が一番の功労者だといえましょう。コロンボ博物館へは12月16日に全員招待され、夕刻から設立100年をむかえた国立コロンボ博物館へでかけました。コロンボ博物館は動物学、考古学、民俗学等をふくめ博物館は綜合博物館として運営されておりますので、その展示や研究分野も巾がひろく、資料も多くとうてい予定されていた短かい時間では充分見学しきれるものではありません。

スリランカ　ファンディション・インスティテユト（シンポジウム会場）でのスリランカの部族生活写真展

それでも主として自然科学部門の展示室をみた限りでは、特別に金のかかった、やたらと目につくような工作展示はなく整然と資料が分類展示されており、全体として日本の中型の博物館をその規模においてこえていないと思いました。しかし考古学や、歴史部門の展示はなかなか見事なもので、スリランカの歴史とこの土地につくりあげられた文化、とくに仏教文化の大きな働きについては、驚くべきおびただしい美術品が陳列してあって興味を深めてくれます。

解説をしてくれたボースさんは、野外博物館の専門家なのですが、博物館の自然保護への役割り、考古学資料、埋蔵文化財の保護と社会教育へのむすびつきの重要性を強く主張していました。展示技術や、解説法がとくにすぐれているとは思いませんが、関係職員の熱意のほどがよくわかります。わたしがスリランカの古地図がみたいといいますと２階の一番奥の部屋までつれていってくれました。おかげでバスの出発をすっかりおくらせてしまいました。

スリランカの文化財保護も、多くの海外観光客のさっとうで苦慮させられている点が多くあります。それは訪れたアスダラ・プウラ、ポロンナルワ、シギリア、などという仏蹟地においてもみうけられ『公開と保存』とがぶつかりあいます。シギリアの有名な岩蔭にかかれた壁画もかつて破損の害にあったということですし、コロンボ博物館の民俗部門のエンダガマ学芸員も大いにふんがいしておりました。

エンダガマさんは、シンポジウムのスリランカ側の大論述者で、今回は大いに活躍していました。研究発表に、視察旅行の案内に本当にサービスこれつとめ、学芸員精神を大いにみせつけてくれました。彼の「スリランカにおける伝統部族組織の形態について」は多くの参加者の興味をよびましたし、彼の手作りのガリ板づりレポート（資料目録）は決してていさいの良いものではないのですが、意欲のこもったものでした。

ポロンナルワにて　パラクラマ・バフー王の像
自然の岩から彫り出された立像　保存について討議

金がなければ仕事ができない。などとはこの国の学芸員たちはいわないで、さっさと手あたり次第のものをフルにつかって仕事にして行っているのです。これは、民家の保存や、伝統技術や、芸能の保存に働きかける学芸員たちの行動力にもみられます。エンダガマ氏たちは毎日といってよいくらい野外調査にとびまわっているようです。シンポジウム会場にあった彼等の自作のコーナー「スリランカの部族の生活写真展」は、日本の中学校のクラブ活動のような一見幼稚な展示をしておりましたが、まことにおおらかな、したいことをしているという感じがよくあらわれて、わたしの心を打ったのでした。

このシンポジウムで活躍したスリランカの博物館の人たちは、たしかに日本のように物質文化にみちあふれ、材料といい、技術といいすぐれたものには乏しいかもしれませんが、着々と自分たちでやっています。また日本の博物館のことや、すすんだ展示技術のことを大いに学びたいといっています。わたしたちは逆にこの国の学芸員根性のようなものを学ばねばならないかもしれません。

○文化財をたずねて　－生きている信仰－

スリランカの文化財を尋ねての３日間の旅は、アジア各地からの参加者の心をふかくむすびつけ、又お互いの考えを伝えるには実によい機会でした。夜もひるも、心たのしくなってくるとお国自慢の歌がでてきて合唱となります。

何といいましても日本語を知っているのは同行した科学技術館の嶋田恂さんだけですし、ソ連やチェコスロバキア、モンゴール、ネパールという国からの代表者たちの間ではロシア語がしばしばとび出します。博物館の理解のためにも、もっともっと言語の障碍をとりのぞいて行かねばなりません。すくなくとも英・仏で日本の博物館の現状は、世界にむけて多くの情報を流しておかねばならないとつくづく思ったのです。国際会議にしばしば出かけている岩崎友吉氏（全日本博物館学会代表委員）もＩＣＯＭで日本が一番しられていないこと、我々はもっともっと海外に働きかけねばならないといつも口ぐせのように云っておられるのを、この３日間の旅行で思い起こしました。シンポジウムで話題となった問題点をこの機会に熟知することができました。「変貌するアジア社会における博物館の役割り」を発表したネパールのセレスターさんとは、ずいぶん沢山話あいました。カトマンズの博物館のデザインに二人の日本人が協力していることも知りました。

セレスターさんは日本のもつ物質文明に大いに興味をもっているのですが、わたしにとっては、日本の博物館がそれほど豊かだとは思えない面を理解させることがいかにむづかしいかを、いやというほど感じさせられたことです。発展途上国の博物館の人たちが日本をうらやむ気持がよくわかるのですが、わたし共は、やはり謙虚に反省しなければならない点を多くもっていると思います。古い、仏都であるキャンディにおきましても、他の仏蹟聖域におきましても多くの仏教の信者たちが敬虔な祈りをささげています。はだしになって仏塔のたつ聖域に入って、スリランカの人々と一緒におりますと、人の心の豊かさを育てている仏教やその他の信仰が、この国の自然や文化財にどのように働らきかけているかをもっともっと知らねばならないという思いに駆られるのです。

そして、ネパールのセレスターさんも、タイ国のチャンポンペンさんも、インドネシアのスタルガーさんも、ド・シルバーさんの奥さんもみな仏教徒で、心をこめて仏に祈っている姿をわたしはみて、アジア地区のシンポジウムのもう一つの一面をみい出したようにも思えたのです。

それにしても、寺院の境内や、一寸した森や、芝生に、赤い顔をしたトクモンキーが沢山いて、それをみつけると皆が、わたしに声をかけてくれるのには、いちいち恐縮したものです。野犬とサルが仲よくくらしていて、何のトラブルもありません。牛ものんびりと鉄道線路の上でココナッツをかじっています。生きものを殺さないという戒律のなかで野生動物の保護がとくにゆきとどいているスリランカでは5つの自然保護区がつくられています。何よりのおどろきは歴代王朝のつくったタンクとよばれる水源地、灌漑用水地の発達です。こうした自然ののこされた中で、独立後のスリランカは近代化という急激な社会変化をむかえているのです。したがって文化の保存、とくに大衆文化、生活資料の保存こそは今日の問題といわざるをえないでしょう。そのことは同じように急速に都市化のすすんでいるイランのテヘランからやってきた人類学者のハロキさんも気にしていました。考えれば、わたしたちはアジアの社会で全く同じことを考えざるをえないようです。

○博物館の役割　－アジアの仲間たち－

シギリヤの遺蹟をたづね、シギリア・レデイとよばれる美しい婦人像の壁画を眺めて高い岩場からおりてきますとオーストラリアの民族学者のニッチ博士が遺構の写真をとっていました。静かな岩にかこまれた道をあるきながら、「民族にとってのこすべきもの、のこるということの意味」について話あいましたが、同博士は、「伝統的マオリ文化の強化方策」について報告した人ですが、部族のもっている文化と伝統技術などが、刻々と変って行くことに対して、博物館そしきは大きく力もって保存に働きかけねばならないといっておられました。

今回のシンポジウムで沢山の博物館人と親しく討議ができたことは幸いでした。とくにアジア各国の民俗民芸博物館が、国の行政によっても育成されていること、ＩＣＯＭの組織活動もこれを支援しており、われわれは、手をとりあって、消滅しつつある民俗関係の資料や文化財を発掘し、またこれを正しく後世につたえるための協力がますますなされるにちがいないことをお互いに確認しあえたのです。日本のよく知られていない面について、産業公害や汚染なども、博物館の人たちは目をつぶって通りすぎることができませんし、わたしたちの国の物質文化のゆくえについては、さらに討議をすすめるべきでしょう。いくつかのシンポジウム提案を今回はわたくしも試みましたが、文化財保護のための社会教育の必要性こそ大いに問題にしなければなりません。愛知県では、博物館をめぐって文化振興会議がすでに２回もひらかれていますが、本当に博物館を中心として文化財保護や文化が論じられねば博物館存在の意義が失なわれます。参加者の一人一人が国へ戻って精一杯の努力をして、自国の博物館のためにがんばらなくてはならないと決意させられたのも、このシンポジウムと、スリランカの社会環境の中の人々のくらしと博物館と文化財の多くを目のあたりにみたからでしょう。チェコスロバキアから出席した人類学者のイエリネック博士は、博物館学の発展にも実に多くの夢をかけておられ、学芸員養成の交流、そして、民俗・民芸をふくむ民族学調査研究を、博物館において進めること、アジア地区のこれら博物館が協力して、共同研究そしきをもって資料の調査及び資料の文献化に着手しなければならない点を強調していました。この同氏と共に、スリランカシンポジウムの終了後、テヘランの博物館へでかけるようになろうとは、全く思ってもいなかったのですが、ましてや、テヘランの文化芸術庁、博物館部において、博物館学の講義を職員さん

たちにさせられるようになるとは、ついぞ思わなかったのです。イランの博物館の意欲的な博物館行政の運営方式については、折りをえてあらためて御紹介させて頂ければ幸いです。

○おわりに

この充実したシンポジウムで忘れ難い博物館人は、インド・イコムの委員長のグレース・モーレイ博士です。

彼女は老令にもかかわらずまことに精力的にすべてのスケジュールをすすめ、私共を支援し指導し、この会議を成功させました。モーレイ博士が、日本と日本の博物館にいかに多くを期待しておられ、日本のアジアの博物館に対するさらに積極的な協力活動を要請していることをお伝えしなければならないと思います。

日本の博物館もアジア諸国の博物館の中にあって今日の問題のいくつかをアジアの博物館人ととりくんで行くことになるにちがいない。文化財保存の技術の研修に交流に、文化財の調査研究に、学術研究に博物館の道もひろがって行くのであります。

〈日本モンキーセンター　学芸部長〉

アメリカの理工学系科学博物館の印象

滝　本　正　二

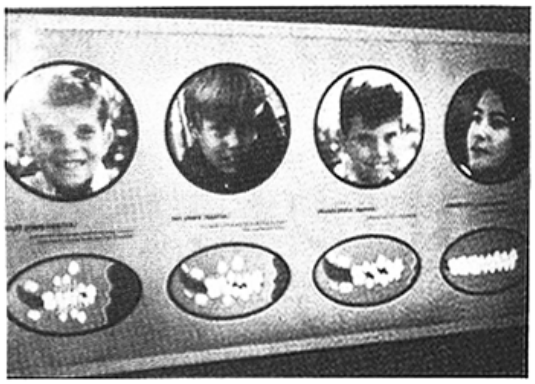
昭和48年の秋約１ヶ月間にわたって北米地区の理工学系科学博物館を視察する機会を得た。何しろ広大な国で、町から町への移動はほとんどジェット機、それに言葉、習慣のちがいと不自由だらけの旅であったので、その特徴を充分把握し得なかったが、そのときの印象を幾つかの施設について略述し参考に供したい。

〔カリフォルニア科学産業博物館〕

ロサンゼルスのダウンタウンから車で約20分ほど行ったエクスポジョン公園のなかにある。この公園のなかには、またアメリカでも屈指のロサンゼルス郡立自然史博物館もある。カリフォルニア科学産業博物館は、1872年に設立された歴史の古い博物館で、カリフォルニア州と財団法人が共同して運営している。展示は、科学、技術、産業と広い範囲にわたり、特にユニークなのは、「健康の科学」と「歯の衛生」というテーマの展示である。前者の展示ホールでは透明人体像による人間の諸器官の解説を中心に、骨格と筋肉、循環系、神経系、ホルモン、感覚、生命の誕生、人間の成長などが、模型、実験装置によって紹介されている。さらにアメリカ国内で大きな話題となっている麻薬、ガン、高血圧などの成人病の予防と治療について解説も行われ、また、「歯の衛生」に関する展示室では、オリエンテーションホールとして使われている口腔部の大型モデルを中心に、歯の構造とはたらき、人間と動物の歯の比較、歯の成長と発達、歯の疾病の予防と治療などについて解説されている。

展示内容の面に加えて、展示技術に関しても、新しいディスプレイテクニックを大巾に取り入れ、展示を美しく、また魅力的にという努力がなされているのも大きな特徴である。特に物

理、化学などの展示では、科学性と芸術性をミックスした、美術的で美しい展示方法、自ら試し体験できるDo it yourself 方式の展示方法、さらに有能で経験のある博物館教師のデモンストレーション、特別解説などが多く取り入れられている。



カルフォルニア科学産業博物館の歯の衛生にに関する展示

〔リューベン・エイチ・フリート宇宙科学館〕

強い陽光のふりそゝぐサンジェゴの代表的な公園バルボア・パークのなかに設けられた宇宙科学館である。プラネタリウムホールでは、プラネタリウムによる星空の投影と、70㎜の映画フイルムの超ワイド映画の投影を組合わせて行なっている。ホールのシートは、普通のプラネタリウムのように平面的におかれておらず、階段式となっていて、また星空を投影するドーム状スクリーンも傾斜させてあり、プラネタリウム主投影機に邪魔されることなく、スクリーン全体を見ることができるようになっているのが特徴である。

プラネタリウム主投影機は、ピンホール式プラネタリウムのメーカーであるスピツッ社の開発したSPACE TRANSIT SYSTEMの一部で、70㎜の超ワイド映写機IMAXとともに、コンピュータによって操作されている。見学したときは、「太陽をとらえる」のテーマで投影が行われたが、太陽の1年間の動き、日食の解説に始まって、モリタニアの日食観測の様子、南米の遺跡と自然の風景がスクリーン一杯に投影され、実際に船に乗って濁流をくだったり、小型飛行機で谷すれすれに飛びまわる実感と迫力を強烈に受けたように記憶している。

IMAXのシステムは、大阪千里丘陵で開かれた万国博覧会で使用されたと聞いているが、今年の夏から約半年間東京の船の科学館を中心に開催される宇宙開発に関する博覧会にも出品される予定である。大規模な映像システムとして、今後の参考のため一見する価値はあろう。

〔ローレンス科学館〕

カリフォルニア大学教授で、サチクロトロンの開発により同大学最初のノーベル物理学賞の受賞者となったローレンス博士を記念して設けられた科学館である。サンフランシスコに隣接するバークレーの町の広大なカリフォルニア大学のキャンパス内にある。

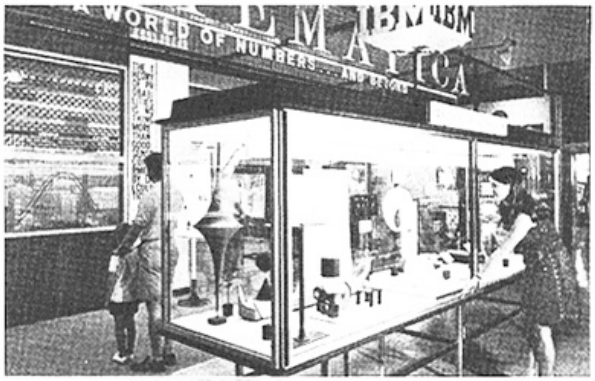
市民のための科学知識普及の機関として、天文学、生物学、化学、物理学、数学に関する展示並びに各種の教育プログラムが充実し、また近隣の学校などに設けられたコンピューターのセンター的役割も果たしている。科学教育に関する研究、科学を担当する教師の現職教育も中心的な事業で、全予算の約50%が新らしい科学教育技術の開発に当てゝいる。

このベイエマリア地区には、今一つ探検館と呼ばれる科学博物館が、サンフランシスコ市街のゴールデンゲートパークのなかにある。この科学館は、1915年開催された太平洋・パナマ国際博覧会に使用された古風な建物のなかに、1969年新設されたもので、フランク・オッペンハイマー博士の指導の下に、知覚に関する実験を中心に、ほとんどの展示品をそのワークショップで開発、製作したというユニークな科学館である。

〔シカゴ科学産業博物館〕

ドイツのミュンヘンにある、ドイツ博物館をモデルとして、シカゴに1933年設立された世界最大の科学博物館である。展示面積約40,000㎡、予算は年間約12億、職員数は常勤300名、非常

勤175名、展示内容は物理学、化学、数学などの基礎科学から電気、機械などの応用科学、医学、薬学、ライフサイエンス、そして一般産業と広い範囲に及んでいる。観覧料は無料であるが、州、市の補助金、食堂売店収入に加えて、各種団体、会社の寄附金により、その運営費をまかない、また産業界の協力による展示品の更新を強力に推新している。そのためか展示品に企業色が強く出ていることは否定できない。



シカゴ科学産業博物館の数学に関する展示

展示のなかで特に注目されるのは、数学に関するものである。これには電子計算機の代表的メーカーであるＩＢＭ社がスポンサーとなり、とかく抽象的な数学の分野を、具体的にかつ興味深く展示している。メビュースの帯の可動模型をはじめとし、数学の歴史、加法と乗法の関係を調べる実験、射影幾何、立体など、平易な方法で美しく展示されており、今後参考とすべき点が多い。

〔オンタリオサイエンスセンター〕

シカゴの科学産業博物館とともに、北米地区最大の偉容を誇る科学博物館で、科学の原理およびその応用について展示解説することに主眼をおき、観覧者自ら直接手を触れ、動かし体験できるようになっている。

導入スペースとして設けられている「科学のアーケード」のコーナーでは、自転車のペダルを踏んで発電し、テレビの画面に観覧者の表情をうつし出す実験や、ミニチュアの舞台を使って照明効果を確かめる実験、その他知覚や錯視の実験など、興味深い実験が約90点ほど、2000㎡の展示ホールに所せましと並んでおり、この科学館の大きな特徴となっている。この他専門職員による実験のデモンストレーションも、物理、化学に関する基礎的な現象について行われ好評を得ている。

このサイエンスセンターで今一つ特筆すべきことは、可能な範囲で展示品の自家製作を進めていること、そして展示品のデザイン、設計、製作のために、約90名の職員を配置し、また木工、金工、塗装、電子および電気関係のワークショップを設けていることである。この傾向はアメリカのみならず、ロンドン、パリ、ミュンヘンなどの大科学博物館でも見られるが、今後わが国でも考慮すべき課題であろう。

〈市立名古屋科学館　学術係長〉

－施設紹介－

古　橋　懐　古　館

位置　古橋懐古館は、愛知県の北端、境を長野県、岐阜県に接する山の町稲武町にある。この町は中央で善光寺街道（国道153号）と美濃街道（国道257号）が交叉する交通の要衝で、古い歴

史を秘めているが、古橋懐古館と、そのゆかりの古橋家は、この交叉点のすぐ近くである。

沿革　古橋家は豪農として代々この地方に重きをなしてきたが、その六代暉兒は、夙に国学に傾倒し、文久３年（1863）江戸に上って平田鉄胤の門を叩き、平田没後門にその名を連ね、これを機会に国学者をはじめ、儒学者、勤王家、経世家などの書画を買い集めた。当時の「年内諸入費月改帳」に、僧契仲、荷田東磨、賀茂真渕、本居宣長など国学者をはじめ、頼山陽、貫名海屋など儒学者、或は僧月照、立原杏所などの名が見える。その後も収集を続け、殊に慶応３年（1867）に比較的多く、藤田東湖、会沢正志斉、藤森弘庵などを加えている。これを七代義真がうけつぎ、一貫した思想を以て意図的に収集したが、あたかも明治の変革期にあたり、その広い交友（－例－小磯崎雪窓－日本的収集家）と、天性の文化的資質と相俊ってその分野を広め、八代道紀もよくこれを継承し、昭和20年、その逝去に際し、山林1000余町歩をはじめとして、これらも併せ寄附し、財団法人古橋会を創設した。

財団法人古橋会は、創業以来、各種の公益事業を推進したが、昭和33年、七代義真の50年祭を記念して、展示館（現２号館、延250㎡）を建設し、コレクションの一部を展示することゝした。しかし、非公開であったのでその後各方面より拡張公開の要請が高まり、昭和41年、明治100年の記念事業として、旧味噌倉を改造し、（現３号館、延350㎡）日常使用の什器、民具類も併せ展示して一般に公開した。次いで43年には、鉄骨モルタル塗り平屋の展示室（現２号館３階、100㎡）を建て増し、46年には旧酒倉を改造して、（現１号館延660㎡）その一環とし、これらを有機的に結合し、管理部門と併せ、延2000㎡に及ぶ今日の古橋懐古館となったのである。

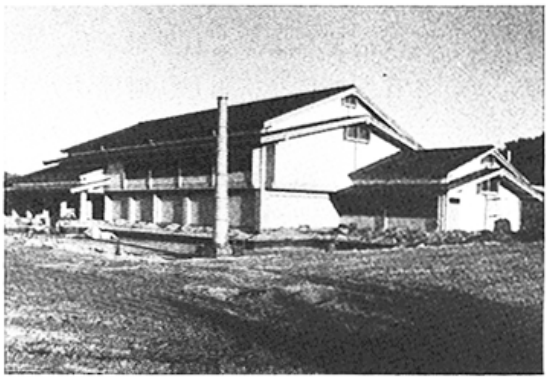
特徴　このように古橋懐古館は、古橋家の父祖３代にわたり、一貫した思想を以て収集秘蔵したものを展示公開し、三翁が志の恢弘をはかろうとするもので、他の美術館とはその趣を異にし、時代の先覚者として、混迷期に挺身し、報国の誠を致した志士仁人の遺墨の殿堂であるから、参観者はこれらの遺墨を通じてその人格に接し、新時代に処する覚悟を新たにせられんことを期待している。

内容　順路に従い、１号館の２階に進めば、第１室は明治維新の原動力となった水戸学関係の遺墨が展示してある。第２、第３、４室は天保の大飢饉の惨状を座視するに忍びず、悪役人や好商に天誅を加えようと大塩平八郎がけっ起し、平田門の生田満が柏崎の陣屋を襲って悪吏を殺傷した天保８年から、野に下って故郷鹿児島に帰った西郷隆盛が、私学校の生徒におされてけっ起し、政府と抗戦して城山に散った明治10年の西南の役までが、新日本の夜明けであり、まさに動乱の40年であるが、この間のもろもろの事変に関係した人々の遺墨が大方展示してある。第５室は国学、第６室は儒学の部屋であるが、殊に国学は古橋父子が平田門でもあった関係上、維新志士と併せ、そのコレクションは恐らく全国にもその類を見ないものであろう。２号館３階は古橋家のコーナーで、300年護持された古橋家の歴史が一目である。２階は御宸筆をはじめ、赤穂義士書翰、秀吉の千成瓢、蕪村の俳画や伊能忠敬の地図など、天下の珍品が展示され、１階は古橋家で使用したやきものが地方別に展開されている。３号館への通路添いにある池には、100才の大鯉が遊弋しており、３号館に入れば、階下は民具室、２階に昇れば、戦前の帝展の重鎮牧野虎雄画伯の傑作が展示され、隣室は日本画が各派別に掲出され、歌人、俳人の短冊、扇面がケース内に収められている。次の部屋は木地室で、六代暉兒が植林を唱導するに当り、木地業が興り、その展示品に、明治30年代、内国勧業博覧会で金杯を受賞した名残を止めている。最後は特別展示室で、年々新規の企画が樹てられ、昭和53年は、明治書壇の先覚で、明治天皇の侍講であった副島蒼海展が催され、その詩書を通じて、高大深遠な学殖、廉直高邁な人格をしのぶことが出来る。帰路の一室には備荒食料が並び、天保のあらめや山牛蒡の葉の乾草、石油かんに密封貯蔵された明治の米は、省資源時代に処する無言の警鐘である。

この他、古橋家に伝わる膨大な文書は、昭和35年以来、筑波大学芳賀登教授をリーダーとする同人によって、調査研究が進められており、その研修の場として、昭和52年度には研修所「昌徳寮」が完成し、展示資料の研修場としても提供することにしている。以上

愛知県陶磁資料館

1．建設の趣旨・沿革



愛知県陶磁資料館は、 陶磁器に関して、美術的・歴史的・産業的に貴重な資料を収集・保存・展示し、陶磁器鑑賞と調査研究の場を提供することにより、陶芸文化の向上と陶磁器産業の振興に資することを目的として計画された陶磁器に関する総合施設です。

東海地方は、古くから日本の代表的な陶磁器生産地として、陶磁器に関する多くの文化遺産と伝統を受け継いできたところです。しかしながら、近年の急激な都市化に伴う開発と生活様式の変化などにより、多くの文化財や貴重な資料が失われつつあり、この古い伝統を正しく後世に伝える施設を必要とする機運がたかまってきました。

こうした背景のもとに、愛知県では、昭和47年から県政百年事業の一環として、日本の代表的な文化・産業のひとつである陶磁器に関する総合施設としての、陶磁資料館建設の計画を進めてきました。そして、その計画の一部である産業館(南館)が、昭和53年６月１日(予定)に開館できるはこびとなりました。

2．建設の概要

建　設　地　愛知県瀬戸市大字山口字南山

建物規模　本　　館・鉄骨鉄筋コンクリート造、地上３階地下１階、5,703.23m²

　　産業館(南館)・鉄骨鉄筋コンクリート造、平家一部２階建、1,519.28m²

開　　館　本　　館・昭和54年（予定）

　　産業館(南館)・昭和53年６月１日（予定）

3．資料の収集

愛知県陶磁資料館で収集しようとしている資料は、 陶磁器及びそれに関連する資料で、土器に始まり現代陶芸作品・産業製品にいたるいわゆる“やきもの”の他、その生産道具や古文書類あるいは図書・文献まで含めている。又、収集範囲は、この地方に限らず広く日本全国の陶磁資料を系統的に網羅できるものとし、更には、日本陶磁史を探り、相互の関連性を比較するため、中国をはじめとする外国の陶磁器を収集することとしている。

4．資料収集の概況

資料収集計画に基づき、昭和48年度より資料収集を開始しており、茶陶を中心とした故川崎

音三氏の190 点にのぼるコレクション、陶磁史、民俗史的に貴重な資料といわれる本多静雄氏のコレクションである陶磁の狛犬200点等の受贈資料に購入資料を加え、昭和53年3月現在約800点に達している。しかし、分類の上からみれば、資料が偏在しており、体系的な展示をすることは難しく、不足資料については、今後精力的に収集する計画である。

民俗館・ビジターセンターを中心とした茶臼山麓園地計画について

原田猪津夫

はじめに

本村では坂宇場御所平の川宇連神社に近い茶臼山麓一帯を整備して、この地方の自然と文化の保存・展示施設として活用する計画をしている。

現在完成している施設としては、明治時代のこの地方の代表的な農家を新築復元した『民俗館』。これと対称的に現代的な建築の民俗文化財展示施設『ビジターセンター』。村内を中心に収集した民俗文化財を安全・確実に保存する『収蔵庫』がある。

ビジターセンターと民俗館

この三つの建物を中心にした約5ヘクタールの地域の中に、開発の影響で失なわれつつある豊根の自然景観と、きびしい自然条件を生かし、対応して来た村の人たちの生活を復元保存していくべく年次計画を持っている。

以下その概要を述べご指導を戴きたいと思っている。

民俗館

昭和47年建築した木造平屋萱ぶき、一部杉皮ぶきの農家である。建築様式や内部の施設・設備は明治中期ごろのこの地方の様子を復元新築したわけであるが、当時そのままを完全に再現することは維持管理や展示の方法で不可能な面もあって、照明に電燈を入れたり床には畳を使用するなど、建築した現在の施設が取り入れられた部分もある。

しかし、かなりの部分は当時の生活様式を保存したものと思っている。家庭生活と密接なかかわりのある設備、日常生活に使用した用具は復元したり村内に残っているものを収集して備えつけてある。例えば、囲炉裏を台所に設け、自在鉤を吊し薪によって湯を沸かした当時の生活の再現などである。

日常生活に使用した民俗文化財は、当時の農家のどこで使用され、どこにどのように収納されていたかを示すよう展示している。例えば、馬屋には馬の飼育用具を、納屋には農具や山椎用具を、炊事場には食器や炊事・調理用具を置き、単に民俗文化財を展示するだけでなく、その文化財と生活とのかかわりを示すよう工夫している。

ビジターセンター

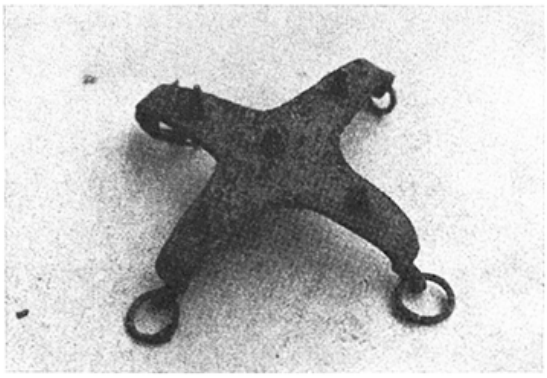
昭和52年新築した鉄骨、一部二階建の展示館である。

民俗文化財の展示を考えて床面積を広くし、展示ケースを壁面を利用して配置してある。展示する民俗文化財は新豊根ダムの建設によって水没した古真立地区から当時収集した約500点と、昭和52年度から発足した民俗文化財収集委員会によって、昭和53年２月現在までに収集した約1500点である。収集は今後も継続し、最終的には10,000点を目指している。

今年度の収集目標は、かつてこの地方の２大農産業であった養蚕と三河馬に関係のある民俗文化財であった。蚕は御蚕様という呼び名が今も残っているように、明治時代から昭和時代までの長い間最大の現金収入源として、どの農家も盛んに飼育されたものである。それだけに養蚕関係の民俗文化財は数多くの種類があり、今に至るも残されているものが多い。しかも飼育方法の変遷によって飼育用具の改良が行なわれており、それらの移り変わりを示す民俗文化財も多い。

飼育用具も近年のものを除いては自家製のものが多く、その製作用具もまた自作したものが見られる。これらの民俗文化財の中には当時の人たちの生活の知恵や創意工夫の跡が窺えるものが多い。

三河馬については、民俗館を見てもわかるように馬は家族同様の扱いで、同じ棟の家の中で同居していたのである。したがって馬関係の民俗文化財もまた豊富で、特に農家の人たちが馬に示した愛情を窺う資料が多い。この面からも昔の農家の生活が偲ばれる。例えば蹄鉄を見ても様々な工夫があり、しかも馬一頭一頭への現物合せで幾つ集めても同一のものがない。また寒冷積雪地豊根を示すように道路凍結時用のもの、急な坂道用のもの等が見られる。



馬用かんじき

これら民俗文化財の展示についての基本的考えとしては、

① 地方博物館の性格として参観者は地域の人が主体となることを想定する。したがって少人数の地域の人が反復見学に来ても飽きない展示をすること。

② そのために、メイン展示を含めて各部門の展示替を容易にし、見学者が毎年新しい展示を見られるよう工夫すること。

③ メイン展示は『国境の民俗資料館』をテーマに、養蚕と三河馬とすること。

④ 展示の中で、昔の人々の物を大切にした心を少しでも理解できるものにすること。

⑤ 同一目的に使用した民俗文化財についても、変遷があるので、その歴史がわかるような展示をすること。

⑥ 生活の知恵、創意工夫、自然との対応の中での生活のようすを示すことのできる展示であること。

⑦ 展示に当っては豊富な資料の中から重点的な展示を簡潔に行うこと。

⑧ 展示テーマは単なる分類テーマとせず総合的で有機的な結びつきのあるものとする。

などである。

展示作業は、収集と合せて行っているのでなかなか理想とは遠く遅々として進まないが53年７月開館を目指して進めている。

収　蔵　庫

昭和52年、もと倉庫を移築、木造一部二階建である。

収集した民俗文化財の収蔵と整理の場として使用している。収蔵部問の床は板張り、整理場はコンクリートモルタル床であり、大型民俗文化財の収蔵もここを利用する。

壁面利用の収蔵も考え、窓を最少限に止めた。また天井も利用できるようにしてある。面積こそ広くないが、収納方法の工夫次第で少くとも10,000点程度の民俗文化財は収蔵できるものと思っている。

その他の施設計画

園地の環境構成には既存の他の建築物等もあって、理想通りにできない面もあるが、現在の環境を生かして豊根村の自然環境とそれとかかわって来た生活・文化を理解できるような野外施設を作ることを考えている。

村内の自然の解説的な展示も合せて設置することを考え、例えば、園地の周辺には広く樹木園を作り標高差の大きい豊根村での樹木分布や樹種を理解できるものにするとか、豊富な地下水を利用して湿地や池・水路を作り、湿原の植物園とできれば動物、特に渓流性のものの飼育も予定している。

昔の人の生活を示す施設が村内では見られなくなっているので、そうしたものもここに復元展示する。例えば、交通路としての石畳道とか、木橋・丸木橋・石橋・吊橋などを用いて遊歩道を設置したり、谷川のわずかな水を有効に利用した水車やボットリ（豊根ではトンキラともいう）等の復元も考えている。

近年道路の改良工事によって忘れた存在になっている多くの石仏も、その散逸の防止と供養のためこの地内に集めることも考えている。

お わ り に

茶臼山麓の園地を豊根の文化施設として活用しようとする事業は、まだその緒についたばかりで、実施事項も今後多くの変更をすることとは思うが、失なわれつつある昔の生活文化をここに復元保存するだけでなく、この中からも新しい豊根の文化が生まれる一助ともなり得ることを願っているものである。

〈豊根村教育委員会事務局　社会教育主事〉

『愛知の博物館　No.24』

発行日　1978年3月

発行者　愛知県博物館協会

名古屋市東区東桜一丁目12番1号

愛知県文化会館内（TEL〈052〉971－5511）

編集者　愛知県博物館協会事務局